

留 学 生 通 信

内モンゴルの教育現状と 日本での留学生生活

Present State of Education in Inner Mongolia and Life of Studying Abroad in Japan



那 順
Nasan

■2005年中国遼寧工業大学卒業, 2007年埼玉工業大学大学院工学研究科電子工学専攻修士課程入学, 2012年東京農工大学博士課程入学
 ■主として行っている研究
 ・波長選択性をもつ熱輻射光源の開発
 ■通学先
 東京農工大学大学院工学府機械システム工学専攻博士課程2年
 (〒184-8588 東京都小金井市中町2-24-16 / E-mail : 50012833013@st.tuat.ac.jp)

1 はじめに

私は、中国の内モンゴル自治区に生まれ、2001年高校卒業後、中国遼寧省にある遼寧工業大学の機械製造と自動化学科に入学し、大学卒業後に2年間仕事をして、2007年に日本の埼玉工業大学大学院工学研究科電子工学専攻の留学生として来日し、日本での留学生生活を始めた。

日本と内モンゴルは、気候、自然環境、社会環境、文化、教育などいろいろなところで違っている。本稿では、自分の理解した日本の大学、大学院と日常生活を内モンゴルと比べて述べてみる。

2 内モンゴルにおける教育システム

内モンゴルは中国領土の北辺に位置する自治区であり、モンゴル語での名称は日本語で直訳すると「南モンゴル自治区」となる。面積は日本の約3倍で、人口は2384万人、そのうちモンゴル民族の割合が17%である。モンゴルといえば大草原のイメージを持たれる人が多いが、近年の自然環境

の破壊を受け、砂漠化が進んでいる。私の生まれたところも砂漠化した牧区である。実家は牧畜で生活をしている。

内モンゴルの民族教育は小学、中学、高校ではモンゴル語で授業を受ける。大学では専攻によるが、モンゴル語で受ける授業が極めて少なく、ほとんど中国語で授業を受ける。内モンゴルのモンゴル学校ではモンゴル語のほかに小学3年から第二言語として中国語を習い始め、高校卒業までその授業を受ける。そのため英語の教育が遅れていて、私が中学、高校のときは英語の授業はまだなかった。現在は英語の重要性が認められ、学校での取り組みが注目されてきているが、学生の負担が増えるという意見も出ているようだ。また社会生活でモンゴル語の使用が少ないため、モンゴル学校に行く学生が少なくなり、学校も減ってきた。このことが理由で、内モンゴルの民族教育やモンゴル語は消滅する危険があるという報告もある。

3 日本の大学

はじめて日本に来て、埼玉工業大学に入り、学校内に学生が少ないことに



図1 埼玉工業大学の留学生仲間との新潟旅行



図2 2013年ハウリンバイヤル(春祭り)のステージ



図3 モンゴル相撲

驚いた。中国では大学内に約1万人の学生がおり、学生は大学の寮で生活をしている。大学では外部の部屋を借りることが許されていないので、キャンパスは広いが、どこに行っても人が多くてにぎやかな感じがした。

それに比べると、埼玉工業大学は学生が2000人ぐらいである。学校の規模は小さいが、設備などしっかりしている感じがした。

私を受け入れてくれた埼玉工業大学電子工学専攻の巨先生は先端材料を主な研究対象として、新しい材料設計、材料創製技術の開発、構造材料の健全性の評価に関する研究を進めている。私は、この研究室に入ってCavity Peeningという金属材料の表面を強化する方法について研究を行った。日本の大学は学部4年生のときから研究室に入って研究をするが、中国の大学では修士に入ってから研究を行う。そこが日本と中国の大学で異なるところだ。先生が中国人で、また埼玉工業大学が中国の遼寧省の科技大学と友好大学であったため、研究室には中国人の留学生ばかりいた(図1)。日本に留学しているといっても中国にいるようで、毎年の学園際でお店を出して盛り上がっていたことが思い出の一つである。

2012年に東京農工大学大学院工学府博士後期課程の入学試験に受かったため、岩見研究室に入ってMEMSデバイスへの応用を目的として、高い耐熱性をもつタングステン含有合金の微細構造のめっき成膜法について研究している。基礎研究として、タングステン高含有合金膜のプロセスと合金膜の物性評価、応用として熱輻射光源や

吸収膜といった実用デバイスへの展開を図っている。この研究は、太陽光発電の高効率化に役立つことが期待できる。

4 日本での生活

内モンゴルの気候は日本のしっとりとした気候と違って乾燥している。冬は寒くて風が強い。日本の部屋は狭いが、空間の使い方がうまいと思う。また、道路は狭いが、車の運転には秩序があると思う。アルバイトで初めて寝坊して、時間に遅れて行ったとき、すごく怒られたことが今も記憶に残っている。日本人は時間に厳しく、仕事に対する責任感が強いと感じた。また、社会全体を比べると日本は生活のペースが早く、競争が激しいと思う。日本にきた当初はなかなか慣れなかった。

スポーツでは、来日したときから相撲をよく見る。モンゴル人がやっていることを知って、彼らを応援するために、観るようになったことがきっかけである。モンゴル民族の伝統スポーツで「ブフ」という日本の相撲と似ているモンゴル相撲がある。日本で毎年5月のゴールデンウィーク中に、練馬の光が丘公園で行われている日本最大級のモンゴル祭り「ハウリンバイヤル」でモンゴル相撲を取っている(図2, 3)。そのほかモンゴル留学生の集まりでやっている祭りが年に何回かある。

日本人が水をすごくたっぷり使うのはもったいないと思うときがある。日本は島国で雨が多くて水が不足していないと思うが、内モンゴルでは年間降水量が少ないため、水を大切にすることを幼い頃から学んでいたからである。

日本に来てから「お国はどこですか」と聞かれるのがいちばん答えにくかった。自分のことをモンゴル人と強調したい一方、中国の国籍を持っていたからだ。

5 日本に留学したきっかけ

内モンゴルから日本に留学する学生は多いが、それは日本語とモンゴル語が文法で近いところがあり、他の言葉と比べると勉強しやすいからだと思う。内モンゴルは、モンゴル民族教育の発展が遅く、また、経済発展、科学技術なども遅れている地域である。自分の地域の遅れている現状を変えたい、地域の発展に自分の力を注ぎたいと思って、先進国に留学することが浮かんだ。ちょうどその頃、兄の友達が日本に留学していて、その方の紹介で埼玉工業大学に研究生として留学することができた。

6 おわりに

日本で留学生生活を始めて6年が経った。この6年間で、先生、大家さん、友達、バイト先の仲間など、いろいろな人から助けられ、応援をもらった。日本は科学の発展、社会秩序、国民の素質などに、私が学ぶことがあると思う。これからも日本での生活と研究に頑張っていきたい。